



 とちぎのサムライ

 vol.32

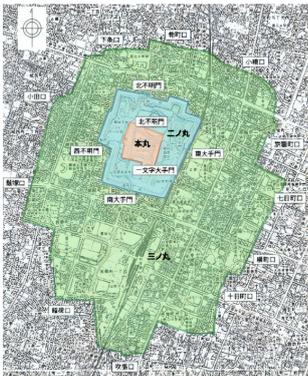
ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わることになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところはお容赦願います。

 (一社)宇都宮建設業協会 木澤喜人

全国津々浦々 お城めぐりの旅



山形の城といえば、山形城。東北では最大で、本丸・二ノ丸・三ノ丸が三重の堀と土塁で囲まれた輪郭式の平城です。後半で触れますが、「北の関ヶ原合戦」と呼ばれた慶長出羽合戦においては、城郭が霞で隠れて見えなかったことから地元では、「霞ヶ城」と呼ばれています。この城には天守がなく、本丸には御殿のみでした。二ノ丸には江戸時代前期まで三階櫓がありました。今も残る二ノ丸の堀や土塁・石垣は、最上氏改易後の元和8(1622)年に城主となった鳥居忠政やその後の保科正之により改修されたと伝えられています。山形城は土塁で囲まれた城郭ですが、城門のみ石垣が用いられています。明治3(1870)年に山形藩が転封となった時、放置されていた城郭は大破し、外壁・矢倉も倒壊寸前の状態でした。城が売りに出されると、山形市が購入し、陸軍の駐屯地を誘致しました。歩兵三十二連隊の兵営敷地となり、城内の櫓や御殿は破却され、本丸は埋め立てられました。三ノ丸の堀も埋め立てられ耕作地として使用されたようです。山形城の現在の城郭は11代城主の最上義光(もがみよしあき)が原型を築いたとされています。第二次世界大戦後は「霞城公園」として利用されていましたが、近年、発掘調査と復原工事のプロジェクトが進行中です。



ここでは、最上義光が非常に悲しい出来事があった話をします。奥州仕置きの帰路、豊臣秀吉の後継者で、のちの関白・秀次を山形城でもてなしたところ、秀次は「東国一の美女」ともいわれた駒姫を側室にもらい受けたいと言いつづけました。義光は関白に対し断り切れず、15歳の駒姫を仕えさせることにしました。しかし、秀吉は秀頼が生まれると、跡継ぎのつもりだった甥っ子の関白・秀次が邪魔になり、関白職を取り上げ、高野山に追放し、挙句の果てに切腹を命じました。駒姫は上京したばかりで、まだ秀次には会っていません。秀吉は秀次の正室をはじめ、仕えていた女性、秀次の子供まですべて京都三条河原で斬首の刑に処し惨殺しました。義光は秀吉に懸命に駒姫の助命嘆願をしましたが、ほぼ無視された結果となりました。何の罪もない駒姫を処刑した秀吉に対し、義光の怒りは頂点に達したことでしょう。

秀吉は天下統一を成し遂げてもその野望は止まらず、明の征服を目指して「文禄の役」と「慶長の役」の2回にわたり朝鮮出兵を強行しました。慶長の役で日本軍は苦戦を強いられている中、秀吉が病死したため、日本軍は撤退しました。秀吉の病死に伴い、豊臣政権が分裂し始めました。関ヶ原直前に、徳川家康は会津の上杉景勝を討つべく大軍を率い会津に向かいました。義光は憎き豊臣側につくわけがなく、盟友・家康との信義を守るべく上杉の領地に攻め入る準備を進めました。山形に東軍側の諸大名が集結し始めたところに、石田三成が挙兵したことで、家康は会津征伐を中止して江戸に引き返しました。それを知った最上応援の諸大名は一応の義理が済んだことで自分の領地に帰ってしまい、義光は単独で強敵・上杉を引き受けざるを得なくなり、4万ともいわれる上杉軍に対

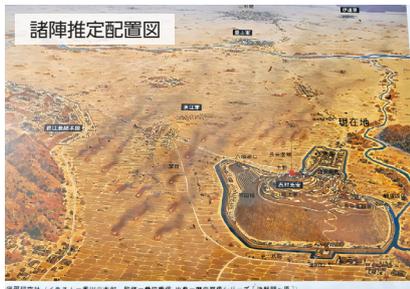


し最上軍は、8千で戦うことになりました。ここで義光は熟慮し「明け逃げ」という戦法で出城のほとんどを放棄して、少ない兵力を集中させ領地を荒らされるのを防ぐ作戦を取り入れました。本城の山形城を死守するため長谷堂城、上山城を最前線基地として戦う決断をしました。上杉軍は家康が江戸に引き返したのを確認して、直江兼続を大将とし最上侵攻を決定。出羽国最大の戦乱「慶長出羽合戦」が開始されました。



直江主力軍が最初に襲いかかったのが畑谷城でした。山形城の西13kmの所にある小さな山城です。江口五郎兵衛光清が500余人で守っているところに、2万の直江軍が攻め込んできました。義光は城を捨てて山形城に戻ると指令しましたが、江口は最後の一人まで戦う気で、聞き入れませんでした。わずかの兵で死ぬまで戦う覚悟の城兵を見た兼続は軍師を送り、無益な戦いをやめて開城すれば名誉ある処置をすると伝えたのですが、江口は最上兵のプライドにかけて拒否し、全員討ち死にするまで戦い畑谷城は落城しました。その後、上杉軍はただちに山形に向かって進撃し、菅沢山に本陣を置いて山形最後の防衛拠点である長谷堂城を2万の兵で包囲しました。

長谷堂城は、麓からの高さ約85m、南北約670m、東西約400mの小規模な独立丘陵に作られています。山腹には曲輪や横矢掛り、切岸、土塁、堀などが効果的に配置されていて、最上随一の堅城で難攻不落の城といわれていました。



義光は最も信頼のおける知将・志村光安と豪勇・鮭延秀綱を、長谷堂城の守将としましたが、上杉軍2万に対しわずか千ほどでした。戦いの初めの頃は、直江方の圧倒的な兵力に押され気味でしたが、次第に地の利を生かした固い防衛と、城兵の奇襲攻撃が続き膠着状態になりました。山裾に押し寄せるも周りは湿地と水堀で大軍で攻めかかることもできませんでした。約半月必死で持ちこたえていると9月末に関ヶ原の合戦で、徳川方勝利、石田方惨敗の知らせが届きました。



長谷堂城から間近に見える直江本陣

ややかな人といわれていました。最上に反抗する豪族たちを服従させる時にも、できるだけ戦を避け無駄死が出ないように考えました。

「人は殺すな、人は生かして力を発揮させよ。」人は誰でも自分の力を認められたいし、死よりは生を望みます。上に立つ者が能力を認め信頼して自分の力を発揮させてくれるなら、それは人の心をとらえ、非常に強い戦力になります。最上義光はいつもそのことを念頭に置いてまつりごとを行ったようです。いつの世も優れ者は違うな～。

『草案を、やっとまとめて一息後、原稿片手に、妻のムチ。』 頓首